

自己変革を進め、イノベーションによる成長を

ICT、AI、IoTといった分野の技術は、我々の想像をはるかに超えるスピードで進化しています。この動きに乗り遅れることなく対応していくためには、この分野での技術に磨きをかけ、イノベーションを起こし、新しいビジネスモデルを構築しながら顧客価値を創造し続けていくことが重要です。全世界を舞台に競争する中、ただ世の中の変化に対応しているだけでは遅過ぎであり、大きな成長は望めません。自らが変革していくことが重要です。

NECとして自社のコア技術は何かを見極め、世界一の技術になるまで徹底して磨き上げる一方、得意でない分野では外部技術も導入しながら自前主義からの脱却をはかり、オープンイノベーションを率先実行することが問われています。

私はこうした観点に立ち、取締役会では自身の経験をもとにそれぞれの案件に対して意見を述べ、NECの成長戦略のスピードアップがはかれるよう努めています。

社外取締役としても一つ、重要な役割があります。第三者の立場から公正な視点で客観的に発言し、コーポレート・ガバナンスをきちんと効かせることです。特に「コンプライアンス第一」の文化を社員全員に根付かせることが最優先だと考えています。取締役会の活性化を通じて、NECが「コンプライアンス第一」で、早く成長軌道に乗ることを期待しています。

社外取締役 **野路 國夫**



自らの行動を客観視し、コンプライアンスの徹底を

会計士の職業倫理のベースに“integrity”という言葉があります。わかりやすく言うと「ウソをつかない」「ごまかさない」ということです。何でもない当たり前のことのように、世の中の不祥事の多くは、この“integrity”の欠如がもたらしています。意図的な犯罪は論外ですが、個人が顧客のため、組織のためを思ってとった行動が、思いがけずルール違反になってしまったり、隠蔽・ごまかしにつながったりといったことは十分に起こり得ます。

それを防ぐには、個人が自分の判断や行動を客観視することが有効であろうと思います。すなわち、自分の判断や行動が及ぼす影響もたらす結果に思いを致し、それを他者に説明できるようにすることです。このことは会社のマネジメントにもあてはまります。取締役会での議論、特に社外役員のさまざまな視点からの質問や指摘は、マネジメントの客観性、透明性を高めるのにとっても役立っていると感じます。マネジメントの客観性、透明性が高まれば、社員の意識も高まり、それぞれが日常業務で自らの活動を客観視することにつながっていきます。

私が社外監査役に就任して1年が経過しました。その職責上、常にコンプライアンスやリスクへの対応ということが頭から離れませんが、社外監査役として「客観視」に努め、リスクに対して過度に防御的にならずに、合理的なリスク・テイクとダイナミックな企業活動をサポートしていきたいと思っています。

社外監査役 **山田 和保**

